

二〇一七年八月三〇日(参加者一二名)

ロープウエイ涼し樹海をひとまたぎ	菜々
仏母寺の庭に数えて秋七草	菜々
爽籟やオリーブの葉をひるがへし	菜々
牧涼し吾を見る牛の目の澄みて	菜々
礎は峠茶屋跡草紅葉	菜々
爽やかや宝前砂紋乱れなし	菜々
秋うらら牧に仔牛の保育園	うつき
仏母へと灯明ゆらぐ堂清か	うつき
行き着かぬ廃寺の路秋思憑く	うつき
秋の雲へと高牧の馬柵のびる	うつき
チーズ工場目指して牧を避暑散歩	うつき
峰寺の白砂の庭の風は秋	小袖
六甲の標高千の秋を聞く	小袖
一湾を眼下に山のバス涼し	小袖
新涼の牧のベンチに瞑想す	小袖
雷激し車軸を流す雨となる	よう子
少年の牧駈け上がる白い靴	よう子
友の腕頼みにのぼる露の澄	よう子

風抜ける鎮守の杜や豊の秋	はく子
夕映えの川面をなぞる秋の風	はく子
小流れの水面をなぞる枝垂れ萩	わかば
水澄むや堰落つ水の音もまた	わかば
カーブまたカーブ山上バス涼し	こすもす
牧場のスタッツフ腰に蚊遣香	こすもす
一望の夕日輝く蕎麦の花	宏虎
那智黒の小径を綴る秋海棠	ぼんこ
夕映をきらきら返す秋の川	満天

定例句会みの選

二〇一七年八月三〇日(参加者一二名)